祝小学校

「学習の基盤となる言語能力を身に付けた児童の育成」
―読む・書く・聞く・話す・話し合う等の言語能力向上に向けた授業づくりを通して―

Ⅰ　研究の内容

本年度は，研究主題に迫るために，国語科を中心に，授業作り・授業実践を中心に取り組んだ。読む・書く・聞く・話す・話し合う等の学習活動を工夫し改善することで，児童の言語能力の育成が図られるという仮説の元，授業や日常的な取り組みを大切にして校内研究に取り組んだ。

1　国語科の授業実践

各学年で研究した国語科の授業を公開し，参観し合った。授業後には授業改善のための手立てについての意見交換の場をもった。

ブロックの中で，学年児童の課題について共有し，発達段階に応じた課題についても共通理解を図って授業を構想した。全学年で実践を行い，児童の実態に応じた工夫や手立てについても学びあった。

（1）授業実践

第１学年国語科授業実践　単元名　すきなもの，なあに
第２学年国語科授業実践　単元名　馬のおもちゃの作り方／おもちゃの作り方をせつめいしよう
第３学年国語科授業実践　単元名　はんで意見をまとめよう
第４学年国語科授業実践　単元名　つながりに気をつけよう
第５学年国語科授業実践　単元名　よりよい学校生活のために
第６学年国語科授業実践　単元名　対話の練習　いちばん大事なものは

2　主題に関わる理論研究

話し方講座（8月実施）では，ＩＴＣ（インターナショナル・トレーニング・イン・コミュニケーション）の韮崎クラブに30年在籍され，2011年ＩＴＣ日本リュージョンスピーチコンテストで全国優勝という経歴の山口久美子先生のお話から授業や生活に生かすことのできる話し方のポイントを楽しく学ぶことができた。日常的に教師と児童が生かすことの出来る内容で，すぐに取り組むことができ，大変有意義であった。

小林千由紀指導主事を招いての学習会（11月実施）では，予め質問事項を伝えることで焦点化された講演内容となり，言語能力向上に向けて言語活動を取り入れた授業づくりのポイントを学ぶことができた。活用頻度の高い資料をいただくこともできた。具体的な実践方法を知ることができ，教職員の研究意欲の向上につながった。

3　甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携

３部会との連携を図り，Ｑ―Ｕ検査の実施（年２回）と分析・活用，家庭学習の推進，「家庭教育・子育てＱ＆Ａ」の活用等の取組を全職員の共通理解のもと行った。中でも，「緊急提言　スマホの時間わたしは何を失うか」「リーフレット」の活用に関しては，6学年が，授業で生活実態調査の結果から，個人個人のメディアとの関わりについて，具体的に考えた。その後，6学年部会の話し合いでは，夜の使用時刻を決め，全家庭で協力していくことが決まった。また，家庭学習の取組では，めあての記述に内容の向上が見られた学年もあった。更に，継続していくうちに，学習内容の深化・拡充も見られた。

Ⅱ　成果と課題

1　成果

・国語科を研究し，授業と日常的な取り組みを行う中で，教職員・児童共に学習の基盤となる言語能力向上に向かうことができた。また，全学級の授業を学び合ったことで，発達段階における課題やその先の見通しについても考えることができた。

・授業後の共有化の時間の確保は，授業者・参観者共に国語科の授業づくり，授業改善につながる学習の場となった。言語活動の具体的な手立てを，実践で検証するなかで，「主体的・対話的で深い学び」のある国語科の授業づくりができた。

・各学年ごと研究仮説検証を行った。【読む・書く】はおおよそ達成することができた。

・ことわざ検定を毎年行っている。担任外の教職員の協力があってこその成果である。全校体制で取り組むことのできる環境に感謝したい。今年度は，一つのことわざを半分に分け，4年生は上半分を聞いて下半分を言い，5年生は下を聞いて上を言い，6年生は意味を聞いてことわざを言うようにした。検定を通し，基礎学力・粘り強さを身につけること・自己肯定感の高まり等の成果を感じる。

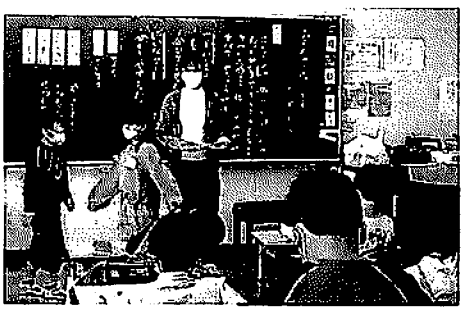
2　課題

・【話す・聞く】について，児童の主体的な学びが実現できるように，学ぶことの楽しさや学ぶことの意義を全ての児童が感じられるように，継続指導をしていく。

・学校生活意識調査の数値の低い項目の向上のための取り組みをする。

・児童が身に付けたことわざや対話力を生かし，さらに言語能力を高めていく。

・「主体的・対話的で深い学び」が可能な学習集団づくりのために，地道な継続指導をしていく。



Ⅲ　成果物

・授業実践の指導案，実践記録，ワークシート，資料等

・祝小家庭学習の手引き　・学校生活意識調査

（研究主任　小林　淳子）